



古代語における引用表現「...と名づく」について

著者	辻本 桜介
雑誌名	人文論究
巻	71
号	3
ページ	1-17
発行年	2021-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029923

古代語における引用表現「…と名づく」 について

辻 本 桜 介

1. 研究対象

本稿では、古代語に見られる「…と名づく」という引用表現の意味を分析する。

- (1) そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して山へのぼりけるよりなむ、その山を「ふじの山」とは名づけける。(竹取・77)
- (2) …然れこそ神の御代より [神之御代欲理] 宜しなへこの橘を時じくかくのこのみの香菓と [可久能木実等] 名付けけらしも [名附家良之母] (万葉・十八・4111)
- (3) 煙けぶり立ち燃ゆとも見えぬ草の葉を誰かわらび蕨と名づけ初めけん (古今集・453)

(1) は、一見して現代語の「名づける」と特に異なる点は無いように感じられる。これに対し (2) (3) はどうだろうか。(2) の「名づく」は「神の御代から (現在まで)」という一定期間内において継続する行為と読める。これは、対象に命名する瞬間的な行為を表すとは解しがたく、現代語の「名づける」とは異なるように見える。(3) では、「…(し) は始める」のようなアスペクト的意味を持つソム¹が「名づく」に後接しているが、これも、この「名づく」

1 古代語のソムについて、文 (1995: 34) は「…(し) は始める」か「初めて…(する)」の意で取れることを示し、酒匂 (2002) は大規模な動きの始発を表す用例が殆どであるとしている。

が一定期間継続する動きを表す動詞だから可能なのではないと思われる。

となると、(1)も、呼称を与えるという瞬間的行為ではなく、一定期間にわたってある呼称を用いる意で解し、「…と呼んだ」などと訳するのが適切なのではあるまいか。この疑問に対する答えを得るためには、古代語の「名づく」の持つ意味を詳細に分析する必要がある。

2. 先行研究

「名づく」に関する先行研究として藤田(2000)と鈴木(1985)が管見に入った。藤田(2000)は現代語の「…と名づける」に、鈴木(1985)は古代語の「…と名づく」に言及している。順に見ていきたい。

2.1 藤田(2000):現代語の「…と名づける」等

藤田(2000:324)は、呼称を引用する「…と」と共起する引用動詞を次のように分類している。

(4) A 「名づける」「命名する」

……対象(ヲ格で示される)と呼び名の一回的結びつけを述べる。

B 「言う」「呼ぶ」「称する」

……対象と呼び名との間のある程度確立された結びつきを述べる。

(藤田 2000:324 の内容を筆者が要約)

この分類に従えば、現代語の「…と名づける」等は対象に呼称を付与する瞬間的な動きを示し、「…と言う」「…と呼ぶ」等は対象が持つ呼称を一定期間使い続ける習慣的な動きを示すということになる。本稿では、藤田(2000)による(4)の2つの分類枠をそれぞれA類・B類と呼んで、古代語の分析に適用する。

表1では、A類とB類の相違点の一部を藤田(2000)から抜き出して整理

表 1 藤田 (2000: 326-330) の指摘内容の一部

着眼点	A 「名づける」「命名する」	B 「呼ぶ」「言う」「称する」
遂行動詞として 使えるか (pp.326-327)	使える ・私はここでこの車をキツツ キ号と名づける。	使えない ・？私はここでこの車をキツツキ号と いう／呼ぶ。
普通名詞を引用 できるか (pp.328-329)	難しい ・？こうした営みを文化と名 づける。	可能 ・こうした営みを文化という／呼ぶ。
名詞以外を引用 できるか (p.330)	名詞 (的な語句) しか引用で きない	動詞等や連語的なものも引用できる。 ・口を出すことを「容喙する」と称す る。

した。遂行動詞として使えるか、普通名詞を引用できるか、名詞以外を引用できるか、という 3 つの着眼点が、A 類と B 類の間の文法的な相違を見出すのに役立つことが分かる。これを、4 節で古代語の「名づく」の意味を分析する際に用いたい。

2.2 鈴木 (1985) : 古代語の「…と名づく」

鈴木 (1985) は上代から鎌倉時代における「…と名づく」の用例の観察結果を示すもので、その中で、古代語の「…と名づく」に関しては次の点を指摘している。

- (5) 和文資料全般と平安初期の訓点資料における「…と名づく」の用例は、“新たに命名する”ことを表す。(pp.91-97)²
- (6) 平安中期の訓点資料の「…と名づく」は、“新たに命名する”ことを表す用例以外に、“既存の名称を説明する”ことを表す用例もある。(pp.100-104)

鈴木 (1985) の言う“新たに命名する”は、先に見た藤田 (2000) による分類 (4) の A 類に当たり、“既存の名称を説明する”は B 類に当たるものと言えよう。そう考えると、(5) の指摘には次の 2 つの問題点があると思われる

2 中田 (1976) も、平安初期加点の地藏十輪經に見られる「…と名づく」について同様の指摘をしている。

る。

第一に、本稿冒頭で述べた通り、(2)(3)のように“新たに命名する”の意(A類)とは解しがたい「名づく」の用例がある。

第二に、鈴木(1985)では確実に“新たに命名する”の意(A類)で解される用例が掲出されていない。鈴木(1985)が挙げるのは、むしろ“既存の名称を説明する”(B類)と解される用例の方のみである。

- (7) 舍衛国に居士有(り)。頌達多と名ク。常に好(み)て孤窮セル乞児に給施す。(小川本願經四分律・乙・62-14, 鈴木1985:99の(31)に相当)

この「…と名づく」は、誰かが新たに「頌達多」という名前を付与する瞬間を描写するのではなく、「居士」が「頌達多」という名前を元々持っていることを表すと解される。現代語では「(名を)頌達多という。」(B類)のように表現する文脈であろう。鈴木(1985)はこれを「混用と思しきもの」とし、例外扱いしているようだが、本当にこの扱いで良いだろうか。

ただ、難解な訓点資料の用例を文意の解釈のみによって分析することには限界がある。本稿では文法的な現象に着目することによって、古代語の「名づく」の意味を詳細に分析し、B類に入るものであることを示したい。

3. 調査結果・分析方法

表2・表3は、和文資料と訓点資料の「…と名づく」の用例において、引用句「…と」に現れた語句の用例数を示した。大きく、普通名詞・固有名詞・述語句の3種に分類してある。訓点資料は、平安時代初期(9世紀頃)に加点されたものを調査対象とし、「…と名づく」と解説されている用例を全て拾い上げた後、付された訓点が乏しく「名づけて…とす／といふ」か「名は／名をば…といふ」と読む可能性³を排除できない用例は、データから除いてある。

3 訓点資料の「名」は「…と名づく」以外に、「名づけて…とす／といふ」「名は／名をば…といふ」という訓読方法があった(鈴木1985)。「名づけて…とす／といふ」

表2 和文資料の「…と名づく」が引用する呼称

			体言		述語句	合計
			普通名詞	固有名詞		
上代	歌集	万葉集	2	2		4
	散文	宣命				
		祝詞				
中古	散文	竹取物語		1		1
		宇津保物語		1		1
		栄花物語		3		3
	勅撰集	古今和歌集	2	1		3
		後拾遺和歌集	1	4		5
	私撰集	古今和歌六帖	1	1	1	3
	歌合	花山院歌合			1	1
	私家集	海人手古良集	1			1
		兼澄集		1		1
		兼盛集	1			1
		輔親集	1			1
		大齋院前の御集	1			1
		朝光集		1		1
		深養父集			1	1
	好忠集		1		1	
合計			10	16	3	29

表3 訓点資料の「…と名づく」が引用する呼称

	体言		述語句	合計
	普通名詞	固有名詞		
大乘阿毘達磨雜集論	28			28
四分律	1	2		3
願經四分律 (小川本)		2		2
願經四分律 (聖語藏本)		4		4
成実論	405	4	36	445
金光明最勝王經	43	20	12	75
妙法蓮華經	1			1
金光明最勝王經註釈	4	4	1	9
大智度論	109	14	17	140
地藏十輪經	93		19	112
大方廣仏華嚴經	5	7		12
百法顯幽抄	126	6	7	139
合計	815	63	92	970

これを見て分かる通り、用例数は和文資料では少ないが訓点資料では多い。訓点資料の「名づく」は古代中国語の「名」を訓読したものであるから、その文法的性格は古代中国語の動詞「名」に近いはずだが、初期の訓点は古代日本語における話し言葉に近い性質を持つので⁴、「名づく」は古代日本語の話し言

ㄨ ふも「名は／名をば…といふ」もA類に属し、「名づけて…とす／といふ」の用法は「…と名づく」と同様のようだが、これらの詳細については今後の課題としたい。

4 例えば大坪(2015:15)は、「初期の間は、訓読即解釈の本義が守られ、訓読は文意に即して行はれ、その時々適切な訓法が用ゐられてゐた」とする。中田 ↗

葉とも概ね一致していると考えるのが自然である。鈴木（1985:95）は「名づく」を漢文訓読語と見て、「大部な源氏物語に一つもその例をみないのは、示唆的でさえある」とするが、これに従うにしても、漢文訓読において生じた「名づく」が古代の日常の言語に紛れ込んだ結果として、和文資料にも時折姿を現している、という構図が想定できる。古代語の「…と名づく」の意味を考える上で、表3に示した訓点資料のデータは重要だろう。

さて、「…と名づく」の他に、やはり呼称を引用する次のような「…とつく」の用例も、和文資料（歌集は万葉集と勅撰集のみを調査）から抽出した。

表4 和文資料の「…とつく」が引用する呼称

		体言		述語句
		普通名詞	固有名詞	
散文系	竹取物語		1	
	平中物語		2	
	落窪物語		6	
	大和物語		1	
	宇津保物語		3	
	枕草子		9	
	源氏物語		3	
	紫式部日記		1	
	浜松中納言物語		2	
	夜の寝覚		1	
	栄花物語		9	
勅撰集	拾遺和歌集		1	
合計		0	39	0

- ㄨ (1954:7)・築島(1983:13)などにおいても、平安初期の漢文訓読において漢字は特定の訓との結びつきが弱かったとの見方が示されている。このように平安初期の訓点は後代のものに比べ翻訳語的な性格を帯びにくいと考えられている。もし古代中国語の「名」の意味が古代日本語の「なづく」の意味と異なっていたならば、「名」を「なづく」と訓読せずに別の相応しい訓読方法を採用する選択肢もありえただろう。
- 本稿の調査によって得られた「名」の用例の中で、動詞的に用いられたものを観察する限り、「なづく」以外の訓を付されている確実な用例は殆どなく、解読者（大坪併治氏）の判断で「いふ」と訓読された次のようなものが4例見られたに過ぎない。やはり平安初期の訓点語である「名づく」は、古代語の口頭語の感覚にも馴染むものだったのであろう。

- (i) 余方とは〔者〕、東方に有り、名〔といふ〕をは白木調国といふ。(四分律・321-6)
- (ii) 活命するを以(て)、即(ち)為(に)字(と)作(して)、耆婆童子といふ〔名〕。(小川本願經四分律・甲・39-16)
- (iii) 八(を)は摩訶波頭摩といふ〔名〕。(大智度論・872-10)
- (iv) …乃し甚深と名ふが如く、…(大智度論・652-12)

- (8) この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。(竹取・19)

表4にはこうした「…とつく」の用例の出現状況を示したが、全て固有名詞を引用するものと判断できた。これはA類の特徴である。(8)も、子供に新しい名前を付ける場面であり、子供の名前を習慣的に使用する行為が描写されているとは解釈しがたい。「つく」はA類の動詞と考えて良いようである。

これと比較しながら、「名づく」の持つB類としての特徴を指摘していきたい。

4. 用例分析

「名づく」は、得られた用例を見る限り確実にA類と解される用例は見出しがたい。

- (9) …うき身ひとつの常無きを〔親が私の〕名を好忠と名づけつつ育む事のかなしさに世を捨てがたみ… (好忠集・93)
- (10) 昔の時に大国有(り)キ。国王をば大車と名(づけ)キ、王子をば勇猛と名(づけ)キ。(金光明最勝王経・196-5)
- (11) 罪人の手・足・耳・鼻・枝節、皆破剥割截(せ)被_レて地に在り。血流(れ)て池と成_レリ。二の大(な)る悪(し)き狗あり。一には除摩と名(づ)く。二(には)除婆羅と名(づ)く。鐵の口猛く_{コハ}毅_ク〔く〕して、人の筋骨を破碎す。(大智度論・870-16)

(9)は反復または継続を表すツツが後接している。これをA類と解すならば、何度も「好忠」と命名し直す、という意味になってしまうが、B類と解すならば、「好忠」という名を習慣的に用いる、という意味で捉えることができる。

(10)はある大国について紹介する文脈で、そこに住む国王・王子の名前を引用している。(11)は地獄の様子を説明する文脈で、そこに居る狗の名前を引用している。これらの「…と名づく」も、B類と解して、その名前が習慣的に用いられる意(「(名を)…と言う」のように訳される)で捉えるべきだろ

う。筆者の見る限り、(9) (10) (11) のように A 類での解釈がほぼ排除される用例は見出せるが、B 類での解釈を排除できる用例は見当たらない。

以上のことから、文意の解釈のみでも「名づく」が B の意味を持つことは確かだと筆者は考えるが、以下では、遂行動詞として使えるか、普通名詞を引用できるか、名詞以外を引用できるか、という 3 つの文法的な着眼点から、「名づく」が B 類の特徴を持つことを示していきたい。

4.1 遂行動詞として使えるか

まず「名づく」が遂行動詞としては使われない点について。

遂行動詞はそれを発話する行為自体が意味となるわけだから、一定期間の習慣的な行為を表す B 類の動詞が遂行動詞になるとは考えにくい。従って、「名づく」が B 類の動詞であるとするれば、遂行動詞として用いることはできないはずである。これを踏まえ、用例調査においては「名づく」が遂行動詞として使われているかにも注意したが、確実に遂行動詞として使われた用例は見当たらなかった。このことは「名づく」が B 類に入ることを示唆すると見て良いだろう。

一方、「つく」は遂行動詞としても使われたようである。

- (12) 天人の言はく、「…その人は、極楽浄土の楽に琴を弾き合はせて遊ぶ人なり。そこに渡りて、その人の手を弾き取りて、日本国へは帰り給へ。この三十の琴の中に、声まさりたるをば、我名づく⁵。一つをば南風とつく。一つをば波斯風とつく。この二つの琴をば、かの山の人の前にてばかりに調べて、また人に聞かすな」とのたまふ。(宇津・俊蔭・14)

(12) は天人が琴に名前を付けていく場面であり、「…とつく」という言葉を

5 (12) で下線部を含む文の直前にある「名づく」は A 類の用例のようにも見えるが、「名(を)つく」と解すべきではないだろうか(表記は依拠テキスト通り)。「この三十の琴の中で音が優れている琴に、(今から)私は名を付けます」の意で解するのが自然だろう。

発することそのものが、名づけという行為として成立している。こうした用法があり得るのは、「つく」が A 類の動詞だからであろう。

4.2 普通名詞を引用できるか

「…と名づく」は、普通名詞を引用する用例が一定量得られる。次の「…と名づく」の用例において引用される「世の中」「家の集 (= 私家集)」「あを馬 (= 白馬)」はいずれも普通名詞であろう。

- (13) わが身から憂き世の中と名づけつつ人のためさへ悲しかるらむ (古今集・960)
- (14) それ人の才学をみがき文章をおれる、家の集となづけて世につたへたり、これをみしれる人はすくなくして、しらざるはおほかり、… (輔親集・序)
- (15) ふる雪に色もかはらでひくものを誰かあを馬と名付けそめけん (兼盛集・118)

これらは和文資料の用例だが、訓点資料においても、次の「善知識」「精進(の)相」「解脱」「遠行者」「近行者」などは、固有名詞とは言いがたく、行為や状態、何らかの特徴を持つ人物全般の呼称というべきもので、やはり普通名詞である⁶。

- (16) 二の因縁を以(ち)て能く正見を生ず。一(は)他に從(ひ)て法を聞く。二は自(ら)正(し)く憶念(す)。從(ひ)て法を聞く(こと) 所を善知識と名(づ)く。(成実論・二十一・77-下8)
- (17) 阿毗曇の法に広(く)説(く)が如(く)、一切の善法(の)中に〔於〕、勲め修(め)て懈(ら)不(す)、是を精進(の)相(と)名(づ)く。(大智度論・855-17)
- (18) 答(て)曰(く)、真如の体の上へに衆の苦都くシブマリ寐り亦性本より染无

6 仏典は難解な用例が多いため、表3で「普通名詞」「固有名詞」と判定した用例数を再検証すれば多少の出入りが生じると思われるが、普通名詞も固有名詞もどちらも引用されるという事実は動かないはずである。

(き)を解脱と名(づく)るを以(て)の故(に)。(百法顯幽抄・58-9)

- (19) 故知, 行者の若无常等の行を以(ち)て五陰を觀見するを遠行者と名(づく)。若減諦を見(る)をは近行者と名(づくる)ことを。
(成実論・二十二・33-上5)

普通名詞はある事物が元々持っている呼称として習慣的に用いられるものであるから、それが頻繁に「…と名づく」において引用されるという事実は、「名づく」がB類に入ることを示すと考えられる。

これに対し「…とつく」の場合、引用される呼称は基本的に固有名詞に限られる。この分布は「つく」がA類に属する動詞だからであろう。

- (20) 右衛門督の御子どもあまたおはしける中にも、三郎をぞ、おほぢ大臣我御子にし給ひて、実資とつけ給へりける。(榮花・一・上-36)
- (21) ただ、親のおはしける時より使ひつけたる童の、されたる女、「後見」とつけて使ひたまひけり。(落窪・一・18)

4.3 名詞以外を引用できるか

「…と名づく」は、名詞以外の要素を引用した用例が一定量現れる。この点も、「名づく」がB類に属することを示していよう。次の用例は和文資料のものである。

- (22) 何事も思はぬ宿の蚊遣火を燠。 [=「悔ゆる」] とたれか名づけせめけむ(花山院歌合・13)
- (23) 名にし負はば頼みぬべきを [[逢ふ(ぎ)] という名を持っているから(恋愛において) 当てになるはずなのに] なぞもかく扇ゆゆし^{あふぎ}と名づけせめけん(古今和歌六帖・3445)

訓点資料でも、述語句を引用する用例は一定量(92例)得られた。

7 「扇ゆゆし」は、扇は男女の仲にとって不吉である、という意味の成句(『日本国語大辞典』第2版)。漢代に、成帝の寵を失った班婕妤が、秋風が吹くと不要になって捨てられてしまう扇に自分自身を例えたという故事があるとされる。

- (24) 何以故，命は飲食・衣被に依る故（に）活す。若（しは）劫し，若（しは）奪するは，是をは外命を奪フと名（づ）く。（大智度論・814-15）
- (25) 色心等の仮実の不同をいふこと正法に乖ケリ。故（に）其の宗を異にすと名（づく）ることは〔者〕中道の宗に異ナればなり〔也〕。（百法顯幽抄・108-10）
- (26) 憍尸迦，是を，菩薩摩訶薩，般若波羅蜜に住（せ）不して，般若波羅蜜を習することを為と名（づ）く。（大智度論・644-15）
- (27) 行者の若禪定に因（り）て滅を縁する智を生（す），是を止を以（ち）て心を修（し）て觀に依（り）て解脱を得と名（づく）。（成実論・二十二・24-上16）

いずれも，ある動き・状態を習慣的にどう呼ぶかを示すものである。このような呼称を引用できるのは B 類の特徴である。

一方，「…とつく」は名詞以外を引用した用例が見当たらない。これは「つく」が A 類に属する動詞だからであろう。

以上，藤田（2000）の着眼点を用いて分析した結果，「名づく」は B 類の特徴を持つということが確認された。

5. 引用される述語句に着目した分析： 現代語の「…と言う」との比較

本節では，述語句を引用する用例を詳しく見ることによって，古代語の「名づく」が現代語の B 類の動詞の中でも特に「言う」に類似することを示す。

5.1 一般に使用される語を引用する形

最初に，現代語の「…と言う」が次のような呼称の引用に用いられることに着目したい。

- (28) 何かの形が失われると，人はそれを「なくなった」と言います。

(BCCWJ/Yahoo! ブログ)

- (29) ところで、興味を持ち夢中になることを「…に傾倒する」といいますが、… (BCCWJ/『やっとうかった日本語!』)

これらは「なくなった」「…に傾倒する」などの、誰でも使う一般的な言葉を引用している。「…と呼ぶ」「…と称する」に言い換えると少々不自然に感じられるだろう（許容する話者にとっても、「…と言う」の方が収まりが良いだろう）。

- (30) ?何かの形が失われると、人はそれを「なくなった」と{呼び/称し}ます。

- (31) ?興味を持ち夢中になることを、「…に傾倒する」と{呼び/称し}ます。

「…と呼ぶ」「…と称する」は、特定の個人（集団）が使う特殊な呼称を引用するのが自然なようである。

- (32) この地域では位牌を披露することを「ネンブツをやってもらう」と呼ぶ。(BCCWJ/上杉妙子『位牌分け』)

- (33) また小県郡では、七月七日に竹を川に流す行事があつて「おねんぶりを流す」と称している。(BCCWJ/前田憲二『渡来の祭り渡来の芸能』)

これらは「…と言う」に置き換えても問題ない。従って B 類の中でも「言う」は、誰でも使う一般的な呼称を引用する形で使われる点において「呼ぶ」「称する」よりも使途が広いと言える。

さて、以上の観察を踏まえて古代語の「…と名づく」の用例を見たい。

- (34) 何事も思はぬ宿の蚊かやり遣火をびくゆ燻る [=「悔ゆる」] とたれか名づけけそめけむ ((22) 再掲, 花山院歌合・13)

- (35) 恋しとはたが名づけける事ならん死ぬとぞただに言ふべかりける (深養父集・30)

- (36) 又経の中に仏の説(き)たまはくは、若人の財を失(ふ)をは少利を失(ふ)と名(づ)く。若智慧を失(ふ)をは大利を失(ふ)と

名(づく)トイヘリ。(成実論・二十二・28-下18)

(34)の「燠る(悔ゆる)」や(35)⁸の「恋し」は誰でも用いる一般的な語であり、現代語では「…と呼ぶ」「…と称する」よりも「…と言う」を用いる方が自然な文脈ではないだろうか。(36)の「少利を失(ふ)」「大利を失(ふ)」も一般的な表現によって仏教的な考え方を解説しようとしたもので、やはり現代語では「…と言う」を使うのが自然と思われる文脈である。こうした用例が存在することは、「名づく」が現代語の「言う」に近いことを示唆しよう。

5.2 事物の一側面の呼称を引用する形

「名づく」が現代語の「言う」に近いという見方は、訓点資料において次のような用例が存在することからも支持できると考えられる。

(37) 若(し)誰の難を離(れ)ぬ(る)とき[則]道を受(くる)に堪(へ)ぬ。又此の人をば四輪具足せ(り)と名(づ)く。(成実論・二十一・82-上9)

(38) 又経の中に仏説(き)たまはくは若信等の五根无キ(ときには)[是]人をば外凡夫の中に住せ(り)と名(づ)く。(成実論・二十二・32-下6)

(39) 何の法をか有に墮せると名(づく)ル。何(の)法をか有に墮(せ)不と名(づ)くる。(成実論・二十二・29-下19)

8 (35)は、藤本一恵・木村初恵『深養父集・小馬命婦集全釈』(1999年、風間書房)では「「恋しい」なんていうのは、いったい誰が名付けた言葉だろうか。「恋しい」ではなく「死ぬ」とズバリ言えばよいのになあ。」(p.78)と訳されており、これによれば、「名づく」は現代語の「名づける」(A類)と同義に取れるようである。「名づく」が後世にA類へと変容していく契機とも取れそうだが、上の句の「名づく」と下の句の「いふ」とがほぼ同じ意味で使われていると見て、「(こんな辛い気持ちの呼び名として)「恋しい」とは、誰が言っていた言葉だろう。「死ぬ」と率直に言えば良かったのだ」のように、過去に誰かが習慣的に用いていた言葉遣いについて詠んだものとは解せないだろうか。その場合、やはりB類と理解すべきだろう。

- (40) 当に知レ、是(の)人をば一切の法眼・三宝の種性を恭敬セ不と名(づ)ク。(地蔵十輪經・東大寺図書館本・64-21)

これらは、ヲ格成分の表す事物そのものではなく、その一側面を示す表現を引用する形になっている。(37)で言えば、波下線部が示す「四輪を具足している」という事柄は波下線部「此の人」の状態ないし属性というべきもので、「此の人」という人物そのものの呼称ではない。

現代語の B 類の動詞として藤田(2000)が挙げる「言う」「呼ぶ」「称する」では、対象の一側面に対する呼称を引用する言い方ができるのは「言う」だけではないかと思われる。

- (41) 一般にはこういう人を、「頭が固い」と {いう／?呼ぶ／?称する} のだ。

5.3 一回的な発言の内容を引用する「…と言う」との違い

以上では古代語の「…と名づく」が現代語の「…と言う」に近い性格を持つことを述べてきた。そこで次のような「…と言う」との違いについても考えておきたい。

- (42) ライブドアの堀江社長のことを「この人って人を見下してるっていか、最近調子乗りすぎだよね。何様ってカンジだよ」といったら「それってヒガミ？」といわれてしまいました。(BCCWJ/Yahoo! 知恵袋)

この「…と言う」も、5.2で見た用法と同様に、対象(波下線部)の一側面を示すものと見ることはできる。しかし、引用句「…と」の言葉は1度発せられただけのものであって、習慣的に用いられる呼称ではない。古代語で述語句を引用する「…と名づく」をあくまで呼称を引用するものと考えするには、こうした一回的な発言を意味する「…と言う」と異なるということも確認すべきだろう。

(42)のような「…と言う」は、ある対象について1度だけ発せられた言葉を引くものであるから、その言葉を発した時の感情・態度を表す終助詞等が引

用句内に現れても良く ((42) の「よね」「よ」)、複数の文によって詳しく示されることもありうる。これに対し習慣的な呼称を引く「…と言う」の場合は、次のように、終助詞が現れたり、複数の文が現れたりことは無い。これを踏まえて古代語の「…と名づく」の用例を観察したい。

(43) ? 一般にはこういう人を、「頭が固いよ」というのだ。

(44) ? 一般にはこういう人を、「頭が固い。融通も利かない。」というのだ。

表5では、訓点資料の「…と名づく」において引用される述語句の末尾に生じた語の用例数を示した(「不明」としたのは、引用語句末尾が解読者による補読となっているものである)。この表から、引用される述語句末に終助詞は一切生起せず、共起する助動詞もモダリティの意味を主とするものが無いことが分かる。

(45) 其レ死相無カラむを験するに、方に救(ひ)つ可キ人なりと名(づ)け)ヨ。(金光明最勝王経・177-7)

(46) …是を般若波羅蜜(の)正義(を)説くをもて、前の功德に勝れたりと名(づ)く。(大智度論・634-8)

(47) 又此の人をは^作為^作応キ所^作を^作為^作り^作為^作る^作応(くあら)不^ぬをは〔者則〕為(ら)不^ずと名(づ)く〔也〕。(成実論・二十一・67-下1)

複数の文を引用しているものもやはり見られなかった。以上の事實は、「…と名づく」が一時的な発言の内容を引くものではないことを示しているよう。

6. 記述結果の整理

表6では、本稿で扱った諸形式の用法を示した。現代語と古代語とで、使われる形式がかなり異なることが分かるが、中世以降の変化過程は今のところ

表5 「…と名づく」が承ける述語末の形式

動詞		39
形容詞		2
助動詞	打消	ズ 11
	完了	タリ 1
		リ 4
断定	ナリ 3	
不明		32
合計		92

表6 本稿の分析結果

意味	「…と」に引用される語句	現代語の形式	中古語の形式
対象の持つ呼称を一定期間用いるという習慣的な動き	固有名詞・普通名詞	…と呼ぶ ／称する	…と名づく
	述語 (句)	対象を示す呼称	
		対象の一側面を示す呼称	
対象に名称を付与するという瞬間的な動き	固有名詞	…と名づける	…とつく

不明である。また、古代語では呼称を引用する表現として次の(48)のような「…と言ふ」もあるが、現代語の「…と言う」とどの程度対応するかなど、不明な点が多い。いわゆる変体漢文においても、(49)のように「名づく」の用例はあり、ある呼称が習慣的に用いられることを表すように見えるが、現段階では全く調査を行えていない。全て今後の課題としたい。

(48) 今内裏の東をば、北の陣といふ。(枕・一〇・44)

(49) 楽所は馬場の西廊の南の妻なり。是れ本より楽人等を候ぜしむる所なり。人名付けて楽所と云ふ [人名付楽所云]。(御堂閔白記・長和五年三月十二日・89)

調査資料

(用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を〔 〕に示し、訓点資料の不読字は〔 〕で示した。)

【和文】○竹取物語・伊勢物語・土佐日記・平中物語・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集……新編日本古典文学全集 ○浜松中納言物語・夜の寢覚・狭衣物語・栄花物語……日本古典文学大系 ○宇津保物語……室城秀之(1995)『うつほ物語 全 改訂版』おうふう ○私家集・私撰集・歌合類(1086年までの成立と目されるもの)……『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』【漢文訓読文】紙面の都合で割愛した。拙稿(2020)に示す使用テキスト一覧の「訓点資料」と同じなので、そちらを参照されたい。【変体漢文】○御堂閔白記……山中裕(編)(2009)『御堂閔白記全注釈 長和五年』思文閣出版

※用例の検索に際して用いた手段は以下の通り。

- ・新編日本古典文学全集所収の資料は国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)を利用した。散文作品の用例はバージョン2017.3での検索結果を、勅撰集の用例はバージョン2020.03での検索結果を用いている。
- ・日本古典文学大系所収の資料は国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』(http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi)を利用した。
- ・変体漢文の用例は、東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」によって見出した。
- ・BCCWJの用例は、コーパス検索アプリケーション「中納言」データバージョン2020.02により抽出した。

参考文献

- 大坪併治（2015）『平安時代における訓点語の文法 上』風間書房
- 酒匂志野（2002）「源氏物語における複合動詞「～しそむ」の意味」『国文』97 pp.85-94（お茶の水女子大学国語国文学会）
- 鈴木惠（1985）「平安鎌倉時代に於ける「ナヲバートイフ」と「トナヅク」について」『鎌倉時代語研究』8 pp.89-116
- 築島裕（1983）「上代語と平安時代漢文訓読語との関係について」『万葉』114 pp.1-15
- 辻本桜介（2020）「中古語における連体助詞的な複合辞「といふ」の諸用法」青木博史・小柳智一・吉田永弘（編）『日本語文法史研究5』ひつじ書房 pp.123-147
- 中田祝夫（1976）「日本霊異記訓読小考」大坪併治教授退官記念国語史論集刊行会編『大坪併治教授退官記念 国語史論集』表現社 pp.77-92
- 中田祝夫（1954）『古点本の国語学的研究 総論篇』勉誠社（1989年の改訂版に拠った）
- 藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
- 文慶喆（1995）「開始を表す複合動詞「動詞+そむ」と「動詞+はじむ」の変遷について」『岩大国語国文研究』1 pp.23-35

[謝辞] 本稿は、第124回国語語彙史研究会（2020年12月5日）で発表した内容に修正を加えたものです。発表に際し、ご助言を下された方々に記して感謝申し上げます。また本稿は、令和2年度JSPS科研費（課題番号19K13210）による成果の一部です。